

高精細画像内視鏡システム全面稼働

がん等検査・診断機能大幅アップ

製鉄記念室蘭

室蘭市の製鉄記念室蘭病院（足永武理事長、松木高雪病院長・三百四十床）は、従来のハイビジョン対応スコープを大幅に上回る高精細画像で大型液晶モニターを備えた消化器内視鏡システムを胆振圏で初めて導入、

一日から全面稼働を開始する。経鼻内視鏡、大腸内視鏡も新機種に一新、がん診療を強化する西胆振の拠点として検査、診断機能を大幅アップさせる。

同病院内視鏡センターでは、道内で初めて蛍光

観察（AFI）内視鏡を設置したのをはじめ、カプセル内視鏡やダブルバルーン小腸内視鏡等を早期導入するなど、先進的検査を進めてきた。

今回新規導入する消化器内視鏡システムは、HG画質で、液晶モニターはこれまでの十九センチから二十六センチへ大型化。ポタソソ一つで「通常観察」と「近接拡大観察」の切り替えが可能なデュアルフォーカス機能を搭載しており、粘膜表面や微細な近接観察でのピントが合わせやすく、高精度観察が可能。なお、ウオータージェット機能も装備されている。

前田征洋副院長は「がんの境界がより分かりやすくなることから、胃や食道等のごく初期のがんが見つけやすくなる」と語る。

新しい経鼻内視鏡は先端外径五・四mmの極細スコープで、高精細画像により診断能力が一段と向上した。大腸内視鏡は受動湾曲、高伝達挿入部、硬度可変の各機能を併せ持ち、観察視野角がこれまでの百四十度から百七十度へ拡大。広範囲観察が可能になったことで、大腸ヒダに隠れた見落としやすい病変発見にも威力を発揮するという。